

百原 新<sup>1</sup>: 報告—第12回国際花粉学会議 (IPC-XII)・第8回国際古植物学会議 (IOPC-VIII) 合同大会  
 Arata Momohara<sup>1</sup>: Report—12th International Palynological Congress (IPC-XII) and 8th International  
 Organization of Palaeobotany Conference (IPOC-VIII) in 2008

2008年8月30日～9月5日に、ドイツのボン大学で国際花粉学会議 (IPC) 第7回大会・国際古植物学会議 (IOPC) 第8回大会合同大会が開催された。4年毎に行われる国際花粉学会議と国際古植物学会議はこれまでは同じ国で別の期間で開催されてきたが、今回は初めての合同大会である。52か国から約850名の参加があり、8会場で48のシンポジウムが用意され、口頭発表536件とポスター発表238件、関連研究集会、5件の公式レクチャーが行われた。開会式は、IPC大会会長で国際花粉学会 (IFPS) 会長の Thomas Litt 博士のピアノと Thomas Heck 博士のサクスの共演に始まった。次に、IOPC大会会長の Hans Kerp 博士によるドイツの古植物学・花粉学の歴史の紹介があったが、これは世界の古植物学・花粉学の歴史そのものでもあった。

シンポジウムには、花粉分析や花粉形態、木材解剖学といった器官別のものも多かったが、合同大会である点を生かし、花粉と大型植物化石、植物珪酸体といった様々な研究対象の講演を取り入れた、地域フロラや、古植生・古環境復元、化石植物全体の復元といったシンポジウムが多いのが今回の特色である。南米やヨーロッパといった地域別のシンポジウムや、時代別の植物生層序やフロラ、系統進化を扱ったシンポジウムでも微化石と大型化石の両方の講演が含まれていた。最近盛んになった化石研究法やデータ処理についてのシンポジウム (“Methods and benefits of 3D reconstruction of fossil plants”, “Pollen calibration for high resolution quantitative landscape reconstructions”) の一方で、化石の命名法という古くからの問題を扱ったシンポジウム “Problems in naming fossil plants and spores” もあった。古生態学的な切り口では “Plant-animal interactions in Deep Time: predation, protection, pollination”, “Integrating paleoecology and population genetics to decipher past vegetational dynamics”, “Biodiversity patterns through time”, “Have plants ever suffered a mass extinction?” などがあった。博物館の展示やテレビ番組での、古植物学者と画家との共同作業による古植生、古生態の復元を扱った “Reconstructing the past: scientists and artists look at reconstructions of extinct landscapes” では、圧縮変形を受けた植物化石の彩色や、葉や枝、植生の配置を考慮して、恐竜などの背景にどのように配置するか、について議論が行われた。

ポスター会場は口頭発表会場から離れており、コア・タイムも設けられておらず比較的閑散としていたことや、花粉アレルギーなど病理学・薬学関係のセッションがなかつ

たことは次回の大会で改善すべき点だろう。高原 光・西田治文両氏を中心とする招致委員会の努力の結果、今回の2012年の大会も国際花粉学会議と国際古植物学会議の合同開催で、東京の中央大学で開催されることに決定した。

エクスカージョンは、会議中の8件の1日野外巡検、会議前に1件 (古生代の化石産地) と会議後の2件 (それぞれ中生代、新生代の産地) の野外巡検が用意された。会議中の1日巡検は、ライン川下流域の Hambach の open cast mine (露天掘り褐炭鉱山; 図1) の新第三紀の堆積物露頭を巡回し、フロラの変化を見る巡検に参加した。鉱山下部に露出する後期中新世の地層ではヌマシギ属の枝条の密集層があったのが、鮮新世になるとトウヒ属の球果が目立つようになり、鉱山の上部は約300～260万年前の後期鮮新世の寒冷化が始まる Reuver Formation の上位で地層が終わっているのを見ることができた。会議後の野外巡検は、Natural History State Collections Dresden の Lutz Kunzmann 博士の案内による、ドレスデンを中心としたザクセン州とその周辺の新生代化石露頭の巡検に参加した。ここでも褐炭鉱山を中心に見て回ったが、Lausitz では中期中新世初頭の厚さ10 mほどの褐炭層の中に、広域にわたって針葉樹の化石林層が露出していたり、ほとんどがコウヤマキ属の葉からなる厚い炭層が見られたりしたことが印象的だった。旧東独時代には国のエネルギーの大半を褐炭でまかなっていたという話だったが、始新世から鮮新世までの葉や種実類を含む未固結の地層が、褐炭鉱山の連続露頭で見ることができるのは驚くべきことであった。

(<sup>1</sup>〒271-8510 松戸市松戸648 千葉大学大学院園芸学研究所)



図1 Hambach open cast mine での化石採集の様子。